

トヨタABCDプログラム



長年の習慣を変えるきっかけは、子どもたちにトイレをきれいにすることの
大切さなどを教えるプログラムだった。

スペシャルオリンピックス



知的障がいのある人たちがスポーツを通して世界を広げていった。
支援する人たちも学び、成長した。共生社会への新たな挑戦。

SMILES

「 闘 う 笑 顔 に 出 会 い た い 」

TOYOTA

世界中がふるさとです。

SMILES

「 闘 う 笑 顔 に 出 会 い た い 」



トヨタグループ

【加工製本】
トヨタグループは、障がいのある方により多くの働く機会を提供するためにトヨタが設立した重度
障がい者多数雇用事業所で、特例子会社に認定されています。トヨタ自動車の中で行っていた
社内印刷、社内郵便物の受発信などの業務を受託業務として行っています。本冊子の印刷・製本
はトヨタグループが行いました。

トヨタ自動車株式会社

〒112-8701 東京都文京区後楽1丁目4番18号

TEL／03-3817-9600

発行／2018年3月

発行部署／社会貢献推進部 グローバル企画室

発行人／岩崎三枝子

Mail／xk-smiles@mail.toyota.co.jp

TOYOTA SUSTAINABILITY JOURNAL

Vol.2
Mar. 2018



およそ80年前、豊田喜一郎はトヨタ自動車を創業した。

「産業なくして、この国の未来はない」

クルマづくりの原点は、

人々が幸せであってほしい、ふるさとが豊かであってほしい

との願いであった。

そして、今、私達のふるさととは世界中にある。

もっといいクルマを考えるように、

もっといい町や、もっといい社会、もっといい未来について考えていきたい。

^{スマイルズ}
sMiLESは、社会の課題と向き合い

笑顔を忘れず、たたかい、未来のために挑戦する人達の記録である。

^{マイル}
1MiLEずつ、より良い世界に近づくために。

たくさんの、闘う笑顔に出会いたい。

sMiLES

1936年4月、トヨタ初の生産型乗用車「トヨタ AA型」見学会に集まれた販売店のみなさま。前列左から4人目が豊田喜一郎。



Vol.2
Mar. 2018

sMiLES

「闘う笑顔に出会いたい」

index

P.03 トヨタABCDプログラム(インド)

長年の習慣を変えるきっかけは、子どもたちにトイレをきれいにすることの大切さなどを教えるプログラムだった。

P.11 社員ボランティア(ベルギー) | 交通安全への取り組み(ベトナム) | 災害支援(南アフリカ)

「いい町・いい社会」を実現する、社員による手作りのチャリティ。

交通事故が大きな課題のベトナム。日本の安全運転のマインドを展開。

2017年10月ダーバンで大規模洪水が発生。深刻な被害からの早期復旧を支援。

P.12 スペシャルオリンピックス(日本)

知的障がいのある人たちがスポーツを通して世界を広げていった。支援する人たちも学び、成長した。共生社会への新たな挑戦。

P.17 スペシャルメッセージ

トヨタ自動車は2018年1月からスペシャルオリンピックス(SO)のグローバルパートナーに就任。SO国際本部ティモシー・シュライバー会長とトヨタ自動車代表取締役社長 豊田章男からのメッセージ。

Special Report 1 小さな手が未来を変える 子供たちと トイレの物語

インドには今も野外で用を足す人が2億5000万人もいるという。

不衛生なトイレ事情は、住環境を壊し、感染症を増やす。

学校では、トイレがないことが原因で、

子供たちが不登校になることもある。

「トイレが欲しい!」

小学校に通う子供たちが立ち上がり、地域を動かした。

トヨタABCDプログラム



子供たちがハンガーストライキをして親に「自宅にトイレをつくってほしい」と訴えた。最初に始めたディクシタさん(右)。写真左は妹のワーシタさん。

ディクシタさんとワーシタさん
姉妹の家は酪農も営む小さな
農家。この村では牛乳は貴重な
現金収入源。



「インドの小さな村で、 なぜ子供たちは ハンガーストライキを したのか」



「トイレができるまではこの辺で用を足していた」と村で
出会った少年たちが教えてくれた。

年収の半分かかるトイレづくり

「私、トイレを作ってくれるまでご飯を食べない!」。

10歳のディクシタさんは、お母さんに宣言した。彼女の家にはトイレがない。早朝、2つ下の妹を連れて数分歩き、畑の近くまで用を足しに行く。

3年前まで預けられていた祖母の家にはトイレがあったのに、久しぶりに一緒に暮らす両親の家にはトイレがなかった。ディクシタさんが住むインド南部のナガラ村は、食べるだけで精いっぱいの零細農家が多く、トイレを作る余裕がない家庭が多い。

家に戻った最初の日、うきうきして遊んでいた彼女はお母さんの言葉に驚いた。

「うちにはトイレがないから、朝起きたら外に行って用を足してね」と言われたのだ。

畑には蛇がいるし、すぐ脇を人が通る。じっと息を潜めて妹が済むまで周囲を見張る。「下痢をするとすごくお腹が痛くて、ひどい日は本も読みたくない」。学校に行ってもトイレには長い列。勉強したいけれど遅刻や欠席をすることもあった。

「こんなのはイヤ! 家にトイレが欲しい」とディクシタさんはお母さんに頼んだが、「無理を言わないで」と言ったお母さんの顔は悲しそうだった。お母さんも外で用を足すのは怖くて、トイレを欲しがっているのはわかっていた。

ディクシタさんはあきらめなかった。野良仕事のとき、何も食べなかった祖母がつらそうに見えたことを思い出した。自分



母と妹のプリアンカ(左)さんのために父を説得したモヒト君。
「大人になったら人を守る仕事につきたい」。



牛を畑に連れて行くモヒト君のお母さん。

が瞬間に広まった。11歳のモヒト君もその一人。モヒト君は放課後に友だちと遊ぶのが大好きな少年。でも頼まれれば、遊ぶのをやめて忙しい母を手伝う。母や妹が外で用を足すときは見張りをする。「お母さんを誰にも見られたくない。お母さんや妹を守りたい」。

村では、外で用を足す女性が男たちの話の種にされることがあった。だから、モヒト君はハンストで父に訴えた。「男は外で平気かもしれないけど、女の人是不一样的。お母さんや妹はそうはいかない。二人を安心させたい」。

現実は一筋縄ではなかった。モヒト君の両親が

栽培するココナツは3年連続の干ばつで収穫は激減し、すでに生活のために借金を抱えていた。トイレ設置は後回しにせざるを得なかった。

トイレ問題は思春期に差し掛かった女子児童にとってはより深刻な問題だ。児童会の会長で最高学年になった12歳のチンチャナさんは家庭の事情でこの村に引越して来て、家にトイレがないのに驚いた。

「外に行くときは絶対に一人では行かない。男の人や男の子に見られるのがイヤ。学校で家にトイレがない人と聞かれたとき手をあげるのも恥ずかしかった」。

が空腹で訴えれば両親が心配してトイレを作ってくれと考え、思いついたのがハンガーストライキだった。お腹がすいてご飯のイメージが目の前に浮かんだが、トイレを作ると約束してくれるまではと頑張った。

空腹でうずくまるディクシタさんの姿を見たお母さんは涙を流した。この村は年収2万ルピー(約4万円)ぐらいの農家が少なくないが、トイレを作るには1万ルピー以上かかるという。年収のかなりの部分をトイレにかける経済的余裕は、ディクシタさんの家にはなかった。

母と妹を守りたい

ディクシタさんの抵抗をきっかけに、小学校の子供たちの間でハンストの輪



チンチャナさん(左)は祖母を手伝い、家事をこなす。妹(中)の面倒をみるのも彼女の仕事。

子供たちにとってNPOのソバーギャさん(右)は、何でも相談できる憧れの存在。



カメラを前に得意気に手を洗う児童たち。



ソバーギャさんは村のコミュニティに入り込み、自宅トイレの大切さを広めている。

お母さんはバンガロールに出稼ぎし、普段は家にいない。「孫はトイレを作りたいと泣きましたが、そのお金がないんです」と祖母は訴えた。そして、大切なイヤリングを手放すことを考えていた。

変革はトイレ掃除から

「家にトイレが欲しい」という子供たちの夢は、貧しさもありすぐには実現しなかった。だが、ハンストや親への訴えはその一歩になった。訴えのきっかけとなったのは、トヨタ・キルロスカ・モーター(TKM)が進めるトヨタABCD(A Behavioural Change Demonstration)プログラムだった。

TKMは、地域に根ざした活動にするために、非営利組織(NPO)の「SNEHA(スネハ)」をパートナーとして選んだ。SNEHA

のスタッフは地域の学校を定期的に訪れ、野外での排泄が衛生環境に与える悪影響や手洗いの大事さ、感染症の予防策などを子供たちに教える。自費でトイレを設置した家庭には、行政から補助金が出ることも伝えた。子供たちにトイレ問題をよく考えてもらい、家に帰って親と話し合ってもらうことへの期待があった。

そもそもインドにはトイレがなぜ少ないのだろうか。貧しさも大きな理由だが、自分の手でトイレを掃除したくないという人が少なくない。外で用を足す方が便利で簡単と思う人もいるという。こうした考え方には、トイレは「不浄」なもので、トイレ掃除は身分の低い人の仕事という社会的身分と職業が結びついた古来の因習が影を落とす。

トイレを増やそうとする活動は、2014年に誕生したモディ政権が本格的に取り組み始めた。TKMも政府に歩調を合わせて、小学校にトイレを設置するABCDプログラムをスタートさせた。

課題の難しさも改めて明らかになった。政府や企業がトイレを作っても、きれいに使ってくれない。汚くなって、放置されるケースも多い。野外で用を足す習慣はすぐには変わらなかった。

トイレという「箱もの」だけを作っても問題は解決しない。人々の価値観や習慣を変えなくては、トイレは使われなくなる。トイレを清潔な状態に保ち、ずっと使える環境をいかに整えるか……。「それがTKMの社会的な役割だ」とナビン副社長は気づいた。そして、学校のトイレ建設に

加え、子供たちに汚れたトイレは不衛生なことを知ってもらい、自分たちできれいにする活動を始めた。

はじめは、親から「子供たちに汚い仕



学校のトイレを掃除するディクシタさん。



タウンミーティングでは村の大人たちを前に子供が意見を述べた。



地元行政地区トップのラタさん。「TKMのプロジェクトは行政と地域社会の隔たりに橋を架けてくれた」。



「私たちも、やればできる」とナガワラ小学校の児童たち。



やっとできたトイレ(右側ドア奥)を前に誇らしげなディクシタさんと家族。

事をさせないで」という声があったという。それをはねのけたのが学校長だった。「トイレ掃除は、他の人の身になって考えるきっかけになる。子供たちは自分の手でトイレ掃除をすることで、これまで大変な仕事をしてきた人やさげすまれてきた人の思いが理解できるようになる」。

子供と女性が社会を動かす

校舎裏に建設されたトイレに、SNEHAスタッフのソバーギャさんの声が響く。「ここを見て。まだ汚れているよ。次に使う人のことを考えて、きれいになるまで掃除しようね」。彼女のやり方をお手本に、みんながブラシでゴシゴシ洗う。ソバーギャさんはさっそうとスクーターにまたがり学校にやって来て、子供たちに様々なことを

教えてくれる存在だ。彼女に憧れる児童は多い。

SNEHA代表は「大学院卒の女性がブラシを片手にトイレ掃除をしている姿なんて、かつてのインドでは考えられなかった」と話す。

ソバーギャさんは語る。「トイレ掃除は本来自分でやるべきものです。トイレ掃除がやがては社会の階層をなくし、みんなが平等な国を作っていくきっかけになると思います」。子供だけでなくトイレ不足について切実な思いを抱いてきた女性が、インド社会に変革のうねりを起こしている。

「トイレが壊れたままなので、なるべく早く修理してください。私たちが学校で使えるトイレは1つしかなく、困ります」。

2017年11月、小学校の校庭で開かれたタウンミーティングで子供たちは村役場へ要望を伝えた。要望への対応は1か月をめぐりに行政によって判断される。インドでは子供の声を尊重する文化があるという。子供たちの意識が変わり、「大人たちが衛生問題で追及されることが多くなった」と教師は話す。

このABCDプログラムに自治体も注目し、後押ししている。地元の行政地区トップにラタさんが就任。トイレ不足を憂いていたラタさんは「NPOや企業には、行政の手が回らないところにも入り込んで、迅速に対応するノウハウがある。長く解決されなかった課題が一気に改善されつつあることに、驚き、喜んでいる」と話す。



「ハンストはいけないことだけど、お父さんとお母さんにわかってもらいたかった」と、母の前で語るディクシタさん。

「小さな手」が未来を変える

ディクシタさん、モヒト君、チンチャナさんの家では、両親や祖母が借金をしてお金をなんとか工面し、トイレを建てた。その後、公的補助も支給された。新しいトイレは丁寧に掃除されているという。児童会が中心となり、子供たちが村を練り

歩いて衛生の徹底を呼びかける活動も始まった。

「今では外で用を足す人はとても少なくなりました」と行政の衛生担当者は話す。学校のトイレ行列も短くなり、時間通りに授業が始まるので、換算すると授業が年間で約20時間増えたという。生徒全体の成績が上がり、特に女子の学力が

向上した。

最初にハンストを始めたディクシタさんの夢は医者になることだ。「お腹が痛いのを誰にも体験させたくない。もっといろんな人を健康にする人になりたい」。

子供たちの「小さな手」は、大人の社会を変え、自分たちの未来をも変える大きな力を持っていた。



※ABCD: A Behavioural Change Demonstration

トヨタABCD[※]プログラム

トヨタ・キルロスカ・モーター(TKM)が、2014年から実施しているプログラム。約200の小学校でのトイレの設置に加え、子供たちに手洗いや、次の人のためにトイレをきれいに使う習慣を身につけてもらう。これまでTKM本社があるインド南部の180の村で3万人の子供たちが学んだ。周辺地区の学校からもこのプログラムを導入したいという声が増えている。

社員の特技を活かし クリスマスに手作りチャリティ



プロジェクトノエル

「世の中の恵まれない人たちのために、社員が知恵を出し合って手作りで始めたのがプロジェクトノエルです」とトヨタモーターヨーロッパ(TME)で社会貢献を進めるスティーブ・ホープさん。60近い異なる言語を母国語とするTME社員は、文化も多様で社会的な課題にも敏感だ。2013年に開始してからはNPOとの連携も強め、ボランティアのチームワークの輪を広げてきた。社員の特技を活かしたチャリティでは、手作りのケーキやお菓子の販売のほか、これまで写真撮影会やヨガ教室にコンサートなども実施。社員が出し合った寄付金は総額4万4千ユーロ(約600万円)にのぼる。集めたお金は、寒い欧州の冬に、家もなく困窮する人たちの生活支援に充てられている。



ボランティア22人でつくったケーキ類は種類が豊富。食べ始めるととまらない手作りチョコレートも好評で、売上は目標を突破。恵まれない人に心を寄せて、力を合わせました。
トヨタモーターヨーロッパ 部品管理、アフターセールス担当
キャサリン・バージェスさん



ベトナムで「安全運転の心」を広める

トヨタ「安全運転インストラクター養成」プログラム

2015年の世界保健機構(WHO)の報告によると、ベトナムでは年間約2万3000件の交通事故が発生。8671人が尊い命を落とす厳しい状況となっている。このような背景を踏まえ、トヨタモーターベトナム(TMV)と地元警察は共同で、運転技術と交通安全マインドを広める「安全運転インストラクター」の養成を開始。安全運転指導に経験豊富な講師をトヨタ自動車から派遣している。17年11月には、現地インストラクター1期生のTMV社員が講師となり、135名のお客様に安全運転教室を開催。「より多くの方に、学んだことを伝えていきたい」と抱負を語った。



ハノイの交通事情を伝えたくて、ヒヤリとしながら撮影。今後もTMVと共に、少しでも交通事故が減ることに寄与していきたいです。
トヨタ自動車 社会貢献推進部
坂主よしみさん



チーム一丸となった災害復旧支援

南アフリカ・ダーバン洪水被災支援

2017年10月、南アフリカのダーバンで大規模洪水が発生。死者11名、5つの病院、42の学校などが被災した。トヨタの工場やディーラーが被災する中、トヨタサウスアフリカモーター(TSAM)はただちに復興支援チームを結成。100人を超える社員がボランティアとして参加し、のべ20の小中学校の再建など、早期復旧に貢献した。「チーム一丸で困難に挑戦するトヨタの精神が活かされた。強い自信と誇りを感じた」と社員からの声があがった。



トヨタサウスアフリカモーター
ゼネラルマネージャー
ジェニー・マレさん

災害支援

自然災害発生時には義援金だけでなく、物的支援およびボランティア活動など人的支援を迅速に実施。また災害直後だけではなく、被災地の実情に合わせた災害復興支援活動も行っている。

Special Report 2

スポーツは世界を一つにする

障がいの壁を 超える新たな挑戦

社会とつながりを求める障がいのある人がスポーツに救われた。
スポーツを通じて、様々な人とのつながりを得て、世界を広げていった。
彼らを支援しようとした人たちもまた学び、成長した。
障がい者スポーツの先に目指すべき共生社会がみえてくる。

スペシャルオリンピックス



スペシャルオリンピックスでは、障がいのある人とない人が一緒にプレーをする「ユニファイドスポーツ®」を推奨。Bリーグの会場で開かれた「ユニファイドバスケット」の試合には、ゲストに元NBA(米プロバスケットリーグ)の名選手、ディケンベ・ムトンボさん(右端)が加わった。



一緒にプレーしてくれたお礼にとムトンボさんの肩を揉む門戸さん。持ち前の人懐っこさで世界的スターとの距離を一気に縮めた。

目の前には身長2m18cmの壁のような元NBA選手、ディケンベ・ムトンボさんがいた。「でかい」。息遣いも聞こえる。「すごく速い」。初めての感覚だった。

ムトンボさんのディフェンスを突破し、シュートを入れることはできなかった。「でも幸せ。楽しかった」と門戸誠利さん(24)は笑った。

門戸さんは知的障がいのある人となない人が一緒にプレーする「ユニファイドバスケットボール」に参加した。知的障がいのある人たちにスポーツの機会を提供しているスペシャルオリンピックス(SO)が今、力を入れているのが「ユニファイドスポーツ®」である。

門戸さんにとってすべてが初めての出来事。2500人を超える観衆の前でのゲーム、元NBA選手との出会い、観客とのハイタッチ……。門戸さんはまた一步、

世界を広げたようだった。

友だちが離れていった10歳のころ

知的障がいのある門戸さんが人との「壁」にぶつかったのは10歳のころ。それまでは一緒に仲良く遊んでいた知的障がいのない同級生との距離を感じ始めた。同級生たちが門戸さんの前を声もかけずに素通りするようになった。彼らも障がいのある人との違いを意識し始め、距離を測りかねていた時期かもしれない。人と触れ合うことが好きで、人懐っこい笑顔で友だちと遊んでいた門戸さんは孤独感を抱えた。2か月ほど学校に行けなくなった。そのころを思い出すと今も悲しく、身体が震えてしまう。

そんな時、SOのバスケットボールに出会った。2004年の春だった。

ルールも知らなかった。コーチに教わ

るままにボールを追いかけて、パスをし、シュートをした。バスケットボールを通じて、再びいろんな人と触れ合い、居場所

スペシャルオリンピックス(SO)とは

知的障がいのある人へ、年間を通してオリンピック競技種目に準じたスポーツトレーニングと競技会を提供する国際的なスポーツ組織。参加する知的障がいのある人を「アスリート」と呼び、日常的に運動に親しみながら自立と社会参加を目指す。パラリンピックの参加者は身体障がいのある人が大半だが、知的障がいのある人も陸上競技、水泳、卓球の3種目に参加できる。

を見つけることができた。本来の人懐っこい笑顔が門戸さんに戻っていった。

知的障がいのある人は、一般的には言葉や概念的な知識の理解に時間を要するが、身体を動かし、その一連の流れから最適なプレーをするタイミングや方法を学んでいける。コーチなどの動きを視覚的にとらえて、その動きを習得するのが得意な人もいる。

門戸さんは今では障がいのない人と一緒に競技するユニファイドスポーツ®に参加できるほど上達し、練習では一番手を出すリーダー格に育った。2013年のS

Oアジア太平洋地域の大会に出場し、初めての海外遠征も経験した。

6年前から大手マンション会社で働いている。障がいのある同僚が暑い中、水も飲まずに働いているのを見て、毎朝自分で買ったペットボトルをそっと手渡すようになった。「大事な仲間ですから」。門戸さんにとって人を思いやることは当たり前のことなのだ。

門戸さんと14年間、ほぼ一緒にバスケットボールを続けてきたのが松野遼さん(25)。練習の場に門戸さんがいなかったら「マー君(門戸さんの愛称)、どう

したんだろう」と気になってしょうがない。「マー君は遼の心の支えです」と母の園子さんは言う。

松野さんは自閉症スペクトラム。特定のことにこだわりがある一方で、人とのコミュニケーションが苦手だ。伝えたいことをなかなか言葉にできない。

園子さんは、松野さんに社会性を持ち、成長してほしいと願った。知的障がいのない人と一緒にいろんなお稽古事を学ぶ機会を何度も探り、「頭を下げ続けてきました」と振り返る。だがSOとの出会いで、ようやく「肩の荷が下りました」と笑



互いをたたえ合うハイタッチはSOのシンボル。小学校のころから14年間ずっと一緒にバスケットボールをしてきた門戸誠利さん(左)と松野遼さん(右)がハイタッチ。ルールも知らない二人だったが、今ではユニファイドスポーツ®で活躍する。



2010年SO日本・東京夏季地区大会に参加した門戸さん。言葉の壁を乗り越えて、多くの人と積極的に交流した。



毎日スーツを着て働きに出る父の姿に憧れていた門戸さん。「子供のころからの夢が叶って、うれしいです」。



SOに参加し始めた10歳の松野さん。スポーツを通して生涯の友となる門戸さんと出会い、14年以上バスケを続けている。



ユニファイドバスケットボールに参加する荒川陽平さん(左)は「アスリートの喜びは、私の喜びにもつながっています」。



松野さんのお母さん、園子さんは「スペシャルオリンピックスは私の趣味になりました。楽しい!」と笑う。

うゆとりが生まれた。園子さんと門戸さんの両親、誠一郎さんとひとみさんはSOのコーチの資格を取得し、アスリートと一緒に汗を流す日々を送っている。

芽生えた挑戦への行動

SOで門戸さんらと触れ合い、松野さんにも変化が見えてきた。「マー君にパスを出したい」とチームプレーを学び、人と協力することを身に付けた。シュートを正確に打てるようになるには筋力トレ

ニングが必要だとわかり、自主的に筋トレを始めた。

「マー君が世界大会に出たらうれしい。でもその次は僕が出るよ」。松野さんは園子さんにそう話すようになった。「障がいのない人の中にいると、違はみんなに『もういいよ』と言われて、挑戦する機会を与えてもらえませんでした」(園子さん)という。そんな松野さんに挑戦する気持ちが芽生えてきた。

SOの始まりは1962年に故ケネディ米国大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバーさんが自宅で開いたスポーツイベントだ。ユニスさんには知的障がいのある姉がいた。当時は知的障がいのある人がスポーツをする機会が少なく、もっとスポーツに親しんでもらいたいとユニスさんは願った。その後、米国ではSOの活動が開く。それから30年ほど遅れて、1994年にSO日本が設立された。

知的障がいのある人がスポーツを通じて、多くの人とかかわり、世界を広げていくのはどの国も同じである。SOの活動が生み出す成果は、知的障がいの有無にかかわらず。障がいのない人にもいい変化をもたらしている。

ユニファイドスポーツ®に参加する荒川陽平さんは、SO活動をする前は「障がいのない人は障がいのある人から障がいのない人に与えられるものはない」と考えていた。しかし競技を通じて、アスリートには向上心が強い人が多く、コーチの指示に対し、全力で取り組んでいることが多いと気がついた。それはバスケットボールを始めたころの自分の姿と重なった。

「上達した私が忘れていた気持ちでした。参加するたびに初心を思い出させてくれる存在だと今は感じています」。荒川さんは電車の中などで障がいのある人が困っている姿を見かければ、声をかけるようになったという。



「友だちは、授業が忙しいのにボランティアもやるのは大変そうと言うけど、練習に来るのが楽しみなんです」と田辺さん。



ユニファイドスポーツ®に汗を流し、みんな笑顔でVサイン。アスリート、パートナー、コーチが一つになっている。

障がいのある人は個性ある「尊敬できる個人」

田辺有紗さんは看護を学ぶ大学生だ。バスケットボール未経験者だが昨年からユニファイドスポーツ®で汗を流す。はじめは看護師として働き始めたとき、障がいのある人と接点を持つことが役に立つと参加した。だが、やがて支援に偏っていた考え方が変わっていった。「スポーツを通して接してみると、それぞれ個性がある尊敬できる人たちです」と話す。

障がいのある人が一方的に「支援」されるのではない。障がいのない人も活動を通じて、障がいのある人から学ぶ機会を得て、お互いに成長していく社会——それは目指すべき共生社会といえるだろう。

トヨタ自動車は2018年からSOのグローバルパートナーになった。冒頭のス

ポーツイベントもグローバルパートナーの契約を記念して開催された。

SO国際本部のティモシー・シュライバー会長とトヨタ自動車の豊田章男社長のそばで、スペシャルオリンピックスグローバルアンバサダーのムトンボさんはこう訴えた。



2015年にアメリカのロサンゼルスで開かれた夏季世界大会には、164か国から8500名以上の選手団が参加した。(c)Special Olympics Nippon

「スポーツは世界を分断するのではなく、一つにします。今日のようなイベントは米国では何年も前から開かれています。日本は今日がスタートです。明日からではない。今日から始めることが大切なのです」。

スペシャルオリンピックス(SO)とトヨタ自動車

トヨタ自動車は2016年にSO日本のナショナルパートナーとなり、18年には国際本部のグローバルパートナーに。SOがグローバルで力を入れている「ユニファイドスポーツ®」の振興を支援していく。今後は、日本、米国を中心に従業員ボランティアの派遣や、SOの理解活動に取り組んでいく。

すべての人に開かれた 垣根のない 世界の実現を

スペシャルオリンピックス国際本部 会長
ティモシー・シュライバー

障がいのある人もない人も差別なくスポーツを通じて交流し、一緒に競いあうときに感じる「喜び」は勝ち負けよりも大切なものだと思っています。

そしてより多くの人がお互いの違いを受け入れ、迎え入れるときに、我々はもっと多くの「喜び」を得ることができるし、これまでにない新しい世界を創造することができるのです。

SOのアスリートは、それぞれの競技で、もっとうまくなりたいと思っています。トヨタの成長を支えてきた高い品質、改善の努力、イノベーションに向けた挑戦は、私たちがスポーツを通じて世界に届けたいと思っている大切な要素と重なり合います。

すべての人に開かれた垣根のない世界の実現を我々は願ってやみません。

トヨタをグローバルパートナーに迎え、共にこのビジョンの実現に向けチャレンジできることに、今、私は心からワクワクしています。

世界中にいる約500万人のアスリートたちもきっと同じ想いでしょう。不可能なことは何もあります。

力を合わせ、公正で楽しい未来を築き上げていると信じています。

.....
イエール大学卒。教育博士。教育者として様々な研究、活動に関わり、1996年からスペシャルオリンピックス国際本部会長。



故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバーさんが1962年に自宅の庭に知的障がいのある子供らを招いたスポーツイベントが始まり、68年に「スペシャルオリンピックス」に。
(c) Special Olympics Nippon

垣根のない チームになるための インビテーション

トヨタ自動車株式会社 代表取締役社長
豊田章男

スペシャルオリンピックス(SO)のグローバルパートナーに迎えていただき、心から感謝しております。

私は学生時代、グラウンドホッケーに出会い、ホッケーに明け暮れる毎日を過ごしました。「豊田」という名前に生まれた私は、相手から先入観をもって見られることが多く、常に「素の自分を見てもらいたい」という気持ちがありました。しかしスポーツをしているときだけは「人間、豊田章男」として見てもらえた。一人のチームメイトとして接してもらえたのです。さまざまな個性を持った人が同じ目標に向かって競い合い、リスペクトし合う世界を築くスポーツの力。スポーツとの出会いが、自分自身の生き方、考え方を变えるきっかけとなり、相手との関係も変わってきた気がいたします。

スペシャルオリンピックスは、すべての人へのインビテーションであると、シュライバー会長は言っておられました。「それぞれが持つ違いを個性として、互いに尊重し合う」、そんな垣根のないチームになるためのインビテーションを、今回トヨタはいただいたのだと思っています。

「すべての人に開かれた垣根のない世界」を実現したい。私たち一人ひとりが、本気で、本音で、そう思えたとき、「Mobility for all」、すべての人が移動の自由と楽しさを感じることができる世界に近づくことができると信じております。

.....
慶応大学卒。米国投資銀行を経てトヨタ自動車に入り、2009年から社長。大学在学中はホッケー部で活躍し、ホッケー男子日本代表に選出された。



トヨタの米国でのSO活動の歴史は約30年。米国で働く社員が1986年にSO南カリフォルニアの活動に協力したのが始まり。2015年のロサンゼルス夏季世界大会ではオフィシャルパートナーに。